氏 名 松本 昇

学 位 の 種 類 博士(心理学)

学位記番号 博甲第 8285 号

学位授与年月 平成 29年 3月 24日

学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当

審 杳 研 究 科 人間総合科学研究科

学位論 文題 目 抑うつの脆弱性としての自伝的記憶の具体性の減少

論文の内容の要旨

松本昇氏の博士学位論文は、抑うつの脆弱性としての自伝的記憶の具体性の減少(reduced autobiographical memory specificity: rAMS)に焦点を当て、rAMS が抑うつの悪化を招く経路の検討、ならびに rAMS が生じるメカニズムの検討を行ったものである。その要旨は以下の通りである。(目的) 著者は、rAMS に関する先行研究において、非臨床群における rAMS と抑うつの関連に関する結果が一貫していないこと、非臨床群において rAMS が抑うつ症状の悪化を予測するかどうかの知見が一致していないこと、rAMS が抑うつ症状の悪化を予測する経路が同定されていないこと、rAMSのメカニズムを説明した CaRFAX モデルに含まれる捕らわれ仮説についての非臨床群を対象とした先行研究の知見が一貫していないこと、rAMS の原因となりうる持続的な自伝的記憶のアクセシビリティの変化について検討がなされていないこと、という5つの問題点の存在を指摘している。本論文は、これらの問題を解決するために行われた12の実証的研究について記述したものである。

(方法) 著者は大学(院)生を対象とした実験的研究を行っている。研究1~研究3では、非臨床群を対象とした rAMS のアセスメント法の開発、rAMS と抑うつ症状の関連について検討している。研究4では、非臨床群における rAMS が抑うつ症状の悪化を予測するかどうか検討をするための縦断的研究を行っている。研究5~研究7では、rAMS が抑うつ症状の悪化を招く経路の検討として、ポジティブ記憶の rAMS が気分不一致効果を減少させ、結果としてネガティブ気分が持続するとする仮説(研究5)、ネガティブ記憶の rAMS によって侵入記憶が引き起こされ、その侵入記憶が抑うつ症状を悪化させる可能性(研究6)、rAMS によって過去のネガティブ経験を過大に推定してしまうことが抑うつの脆弱性となっている可能性(研究7)の検討を行っている。研究8~研究10では、rAMSの原因に関する仮説である「捕らわれ」についての検討として、自己関連手がかりが rAMS と関係するかどうか (研究8)、具体的な自伝的記憶の検索に失敗した際に、自己関連表象の活性化が生じていたのかどうかを検討するために、検索失敗時に何を考えていたのかを尋ねる思考サンプリング法を用いて、

その思考の生起と手がかり語の自己関連性に関連がみられるか(研究 9)、自伝的記憶の検索中に生じた思考をリアルタイムの思考サンプリングによって捉え、それらの思考と実際に報告された記憶の性質の関連(研究 10)の検討を行っている。研究 11・12 では、概括的な記憶へのアクセシビリティが高まり、具体的な記憶へのアクセシビリティが低下するメカニズムを検索誘導性忘却によって説明しようと試み、概括的な記憶の検索が同一の意味的階層における具体的な記憶に抑制を生じさせるかどうか(研究 11)、意味的階層の制約なしに概括的な記憶の検索が具体的な記憶を抑制するかどうか(研究 12)の検討を行っている。

(結果) 研究 1~研究 3 により、非臨床群における rAMS と抑うつ症状の関連を、新たに開発された AMT-0I によって検出できることが示されている。研究 4 では、AMT-0I によって測定された rAMS が 6 カ月後の抑うつ症状の悪化を予測することが示されている。研究 5~7 では、rAMS が抑うつ症状の悪化を予測する経路であることが、記憶の具体性と気分改善効果は独立であること (研究 5)、進入記憶頻度は rAMS と抑うつ症状に関連が見られないこと (研究 6)、過去のストレスフルな出来事に対する概括的な認知が、rAMS と抑うつ症状との関連を媒介していること (研究 7) から明らかにされている。捕らわれ仮説の検討を行った研究 8~10 では、高水準の抑うつ症状において、ポジティブな自己関連手がかりに対する rAMS がみられること (研究 8)、高水準の抑うつ症状において、ポジティブな自己関連手がかりに対する rAMS がみられること (研究 8)、高水準の抑うつ症状において、手がかり語の自己関連性が高まるとともに自伝的記憶検索中に課題無関連思考が生じ、検索に失敗すること (研究 9)、自己関連手がかり語提示時に捕らわれが生じることが確認され、その直後に概括的な記憶の報告が増加すること、実行制御のエラーモニタリング能力は捕らわれ直後の概括的な記憶の報告の減少と関連すること (研究 10) を明らかにしている。検索誘導性忘却を用いた研究 11・12 では、概括的な記憶の検索はむしろ同一の意味的階層の具体的な記憶に対する検索を促進することが示された (研究 11) ものの、意味的階層の制約を課さなかった場合に、概括的な記憶の検索は具体的な記憶の想起成績を低下させること (研究 12) が示されている。

(考察) 目的に掲げられた5つの問題点につき、実証的研究の成果から著者は以下の通り解決し結論を導いている。それらは、①非臨床群においても rAMS と抑うつ症状に関連がみられ、②rAMS が抑うつ症状の悪化を予測すること、③rAMS が抑うつの悪化を予測するプロセスは、気分不一致効果の減少や侵入記憶の増加では説明できず、rAMS に伴って生じるストレスフルな出来事の増大バイアスで説明できること、④捕らわれ仮説が実証されたこと、⑤概括的な記憶の検索は異なる意味的階層の具体的な記憶を抑制すること、である。

審査の結果の要旨

(批評)

具体的記憶の減少は、抑うつ患者においてみられる症状のひとつとして知られており、学術的にも臨床的にも関心の寄せられる現象である。多くの先行研究がある中で、先行研究にみられる問題点や知見の不一致を解消すべく行われた本研究において、緻密にかつ積み重ねられた実証的研究と議論により、非臨床群における抑うつ傾向の高い者の記憶の rAMS を検出する手法を開発した点、真に rAMS が抑うつの悪化を招くことを実証した点、rAMS が生じるメカニズムについてより精緻に議論を積み重ねている点、思考サンプリング法という新たな方法や検索誘導性忘却現象による説明といった、新たな視点からの研究を発展させている点など、いずれも学術的にみて高く評価でき、さらにまた、有用な臨床的示唆をも与えていると評価できる。

平成29年1月17日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。よって、著者は博士(心理学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。